パーソナリティ障害傾向が対人欲求と自意識・他者意識を媒介して精神的健康に与える影響

○市川玲子^{1,2}・外山美樹³

(¹筑波大学大学院人間総合科学研究科・²日本学術振興会特別研究員・³筑波大学人間系)

キーワード: パーソナリティ障害, 対人欲求, 公的自意識

The effects of personality disorder attributes, interpersonal desire, and self- or other-consciousness on mental health.

Reiko ICHIKAWA^{1,2} and Miki TOYAMA³

(¹ Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Univ. of Tsukuba, ² JSPS, ³ Faculty of Human Sciences, Univ. of Tsukuba)

Key Words: personality disorder, interpersonal motivation, public self-consciousness

目 的

パーソナリティ障害 (personality disorder: PD) は、一般青年群にもその特徴が多く見られる、日常生活や対人関係に困難を生じさせやすいパーソナリティ様式である (井合他, 2010)。広範な PD の診断基準に対人関係に関する項目が含まれていること (Bornstein et al., 2014) から、対人関係機能の障害が PD の中核を成す重要な特徴であることが度々指摘されてきた (Segrin, 2001 など)。

市川・外山 (2015) は、PD 傾向と心理的不適応との間を他者との関係性の希薄さや親密度の低さが媒介していることを明らかにした。これらの対人的特徴は、特に他者と関わることに對する不安や回避傾向に関連した表象によって特徴づけられている。しかし、対人態度の背後には様々な対人欲求が存在する (渡部, 1999) ことから、それらの不安と併存している対人的な欲求についても明らかにすることで、対人的不適応のメカニズムの解明が進展すると考えられる。

一般に、ヒトは集団への所属や他者からの受容を確保するよう動機づけられており (Stevens & Fiske, 1995)、そのために他者の注目を集めたり、否定的に評価されないようにする (菅原, 1986)。これらの欲求は、自己の対人的側面に注意を向けた態度・行動を促進し、自己顕示性や対人恐怖心性を高めたりする (菅原, 1984)。しかし、PD 傾向の高い個人は、他者からの受容感が低いことにより、自己確証的に他者からの肯定的評価を志向しない傾向にある (市川他, 2015)。したがって、PD 傾向における対人関係の希薄さや親和性の低さの背景には、特徴的な対人欲求が関与していることが考えられる。

以上のことから、本研究では PD 傾向と対人欲求との関連と、これらが他者が観察し得る自己の側面に注意を向ける程度である公的自意識 (菅原, 1984) と、他者の内面情報を理解しようとする意識関心である内的他者意識 (辻, 1993) および精神的健康に及ぼす影響について検討することを目的とした。

方 法

調査方法 個別記入式質問紙調査

調査対象者 大学生 345 名を対象に調査を実施し、回答に欠損がなかった 294 名 (男性 204 名, 女性 87 名, 不明 3 名; 平均年齢 18.70 歳, $SD=1.04$) を分析対象者とした。

調査時期 2014 年 4 月

調査内容 DSM-IV II 軸人格障害のための構造化面接における人格質問票 (Firest et al., 1997 高橋・大野訳 2002) の境界性・自己愛性・演技性・依存性・回避性 PD に関する項目、対人欲求尺度 (渡部, 1999; “賞賛”, “非拒否”, “回避” の 3 下位尺度), 自意識尺度 (菅原, 1984) の“公的自意識”下位尺度, 他者意識尺度 (辻, 1993) の“内的他者意識”下位尺度, GHQ 日本語版 (中川・大坊, 1985) の“うつ傾向”スケール, 人生満足度尺度日本語版 (Diener et al., 1985 大野他訳 2004)

結 果

PD 傾向が対人欲求に影響を及ぼし、さらに公的自意識と内

的他者意識を媒介して精神的健康の低下に寄与するという媒介モデルを仮定した共分散構造分析を行った。その際、PD 傾向間の相関と、対人欲求下位尺度の誤差変数間、公的自意識と内的他者意識の誤差変数間、うつ傾向と人生満足度の誤差変数間にそれぞれ共分散を仮定した。統計的に有意でなかったパスを削除したところ、最終的に Figure 1 に示す結果が得られた。モデルの適合度は $\chi^2(37)=125.504(p<.000)$, $NFI=.910$, $CFI=.933$, $RMSEA=.090$ と概ね良好であった。

自己愛性・演技性 PD 傾向は賞賛欲求の高さに寄与し、賞賛欲求は公的自意識と内的他者意識をいずれも高めていたが、公的自意識のみが人生満足度の低下に影響を及ぼしていた。また、演技性・依存性・回避性 PD 傾向は非拒否欲求 (拒否されたくないという欲求) の高さに寄与し、非拒否欲求は公的自意識の高さを媒介して人生満足度を低下させていた。つまり、自己愛性・演技性・依存性・回避性 PD 傾向が高いほど、集団への所属を確保するための対人的欲求が高く、そのため自己の外的・対人的側面に過剰な注意を向けて心理的不適応度が低下するといえる。

一方で、境界性・回避性 PD 傾向は、回避欲求を媒介して人生満足度を低下させていた。他者との関わりを回避したいという欲求は、他者の視線・評価を過剰に気にすることにはつながらないが、適応感には負の影響を及ぼすといえる。

Figure 1. PD傾向が対人欲求と自意識・他者意識を媒介して精神的健康に与える影響

注) 記載のないものは $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$.

実線は正のパス, 破線は負のパスを表す。誤差変数および共分散は省略した。

考 察

自己愛性・演技性 PD 傾向における賞賛欲求や、演技性・依存性・回避性 PD 傾向と関連する非拒否欲求は、いずれも公的自意識に対してより強い正のパスを示し、さらに公的自意識は人生満足度を低下させていた。このことから、これらの PD 傾向が高い個人は“他者からどのように見られるか”を気にするあまり、精神的健康度が低くなっているといえる。特に自己愛性・依存性・回避性 PD 傾向は否定的自己認知と関連する (市川他, 2015) ことから、そのような否定的自己像に意識が向くことで苦痛が生じていると考えられる。